

邦人宗教要員四名
回教徒 五百五十万
邦人宗教要員七名

宗教指導要員派遣地

〔プロテスタント関係者名省略 本節解題参照〕
◇新教合計 十六名
カトリック 四名 合計廿名

〔四〕小スンダ及フロレス地区（カトリック）

山口愛次郎（司教）
荻原 晃（権司教）
神父 岩永（六郎）氏
神父 久野（重雄）氏

回教

マカツサル 栗木氏外一名 二名
アンボン 井沢修作 前川堯 二名
メナド 一名 一名
ボルネオ 瀧江賢治 三好淳一 二名
合計 七名
主任小林哲夫氏ハ

資料133 教師派遣依頼の文書

拝啓

決戦体制下教会の使命益々重大を加ふるの時、貴教会愈々御健闘の段慶賀の至りに奉存候、陳者今般海軍省南方政務部より南方地区に於ける基督教会及同信徒指導の為本教団の協力を求め来り候間本教団に於ては喜んで之に応じ正教師五名補教師五名を派遣する事を決議仕り候就ては貴教会牧師 殿を候補者に選定し、文部省を通し海軍省に推薦いたし置き候条不日採用任命の運びに到り可申につき、非常時下国策に順応する意味を以て暫時教会の不自由を忍び牧師を邦家重要任務に御献げ被下度此段謹んで御願申上候

敬 具

昭和十八年十月二日

日本基督教団 教団統理者 富田 満
教会信徒総代 御 中

昭和十八年八月廿一日戦死

- ◎アンボン州概観〔地図付〕〔本文省略〕
- ◇主要産物 〔 〕
- ◇宗教 〔 〕
- ◎アンボン州及アンボン人の事共〔地図付〕〔 〕
- ◇カトリックに就いて 〔 〕
- ◇アンボン州内G・P・M会員数廿万人 〔 〕
- ◇アンボン人男子成人職業別（戦前） 〔 〕
- ◇回教徒数（アンボン州内） 〔 〕

〔編纂者注〕

- 1 メモ(1)、(2)の初めに目次があるが、それぞれの見出しが本文にあるので省略し、本文にない場合に目次に記された見出しを記述した。
- 2 見出しの上のアラビア数字はメモの頁数である。
- 3 もとより本文は原資料通りであるが、叙述の順序、アラビア数字の記述が明白に間違っている場合、最少限の修正を行なった。
- 4 また、句読点は恣意的につけられているので、前後の文章を勘案して、最少限につけ加えた。

4 「大東亜共栄圏」のキリスト者に送る書簡の懸賞募集

〔解題〕 四三年三月九日の教務会で富田統理は、「大東亜共栄圏」のキリスト者たちに送る書簡の懸賞募金の費用が一長老より献げられた、と報告した。その長老は彼が牧する芝教会の会員伊藤立夫であった（伊藤立夫、瀧澤清への吉岡春江インタビュー記録）。資料134は、教務会が立案した懸賞募集の公示（二九四三・五・一七）である。七五篇の応募があったので、富田統理より特別委員として委託された在京教学委員が数回の会合を開き、その審査にあたった。資料135は、教務会（一九四三・一〇・二八）における入選者決定とその発表の記事である。四四年二月二七日に東京基督教青年会館で賞金授与式が開かれた。そのプログラムによれば、審査委員会経過報告を熊野義孝委員、祝辞を小崎東亜局長、比屋根安定、由木康阿委員が述べた、とある。

資料136は、その書簡の全文である。この書簡は印刷された（序文三頁、本文二〇頁、A5判、奥付なし）。その序文を富田は四四年復活節の日に記したとしているが、この

年のイースターは四月九日である。第一章は欧米諸国とそのキリスト教への攻撃、第二章は国体の精華、日本文化の独自性、第三章は日本のキリスト教の固有性と教団成立の意義、第四章はキリストにあるアジアの希望と一致を述べている。各章のニュアンスが多少相違しているが、審査委員が複数の入選論文をあつめて一つの書簡をつくりあげたのではないかと推定される。この書簡は海外を含めて各方面に送られ、各国語への翻訳も関係者に依頼した、という(「共栄圏基督信徒宛書簡」「教団新報」一九四四・一〇・一〇)。

〔参考資料〕

- 「現代の使徒書翰(亀徳正臣)」「日本基督教新報」一九四三・六・三
- 「懸賞書翰文の審査終る」(同上紙、一九四三・一〇・七)
- 「日本基督教団より大東亜共栄圏内に在る基督信徒に送る書翰」懸賞当選発表(同上紙、一九四三・一一・四)
- 〔資料〕日本基督教団より大東亜共栄圏内に在る基督信徒に送る書簡(「福音と世界」一九六七・五)

〔研究文献〕

- 武田武長「教団成立を教会の罪責として」『日本基督教団より大東亜共栄圏内に在る基督信徒に送る書翰』にあらわれた問題(「雨宮栄一・森岡巖編」『日本基督教団50年史の諸問題』新教出版社、一九九二)

- (三) 期日 昭和十八年八月二十日締切
- (四) 送先 東京市神田区錦町一ノ六

日本基督教団総務局宛 (封筒に応募原稿と朱筆の事)

- (五) 応募 原稿は返戻せず入選原稿の版權は教団に属す

尚ほ原稿に所属教会名、職業及年齢を明記のこと

富田教団統理者以下審査員(総務、出版、伝道三局長及び教学委員)に於て厳選し、九月中にその結果を本紙に発表し、左の賞金を呈す

- 一等一名金千円、二等二名各々金五百円、三等三名各々金貳百円。

因みに当選書翰は、富田教団統理者の序文を附し、支那語、比島語、マライ語その他に翻訳し、成る丈速かに大東亜共栄圏内の基督教界各方面へ普及される予定である。尚ほ詳細に就ては教団総務局宛に訊ねられたし。

昭和十八年五月十七日

日本基督教団

〔教団時報〕一九四三・五・一五

資料 134 懸賞募集の公示

懸賞募集

日本基督教団より

大東亜共栄圏内に在る基督信徒に送る書翰

御稜威の下、皇軍将士の赫々たる武勲の裡に、大東亜共栄圏の確立しつゝあるは、我等の最も感激又感謝に堪へざる所である。

これと共に現地の人々に我日本の立場を理解せしむる事の極めて重要なは勿論にして、我々日本基督教徒は進んでこの重大任務を荷ふべきである。

就ては、我々日本基督教徒は、今度共栄圏内の基督教徒に向つて懇篤なる書翰を寄せたい。乃ち先づ我日本の国体の尊厳無比なる所以を説き、日本の大東亜共栄に關する理想抱負を明かにし、次いで日本基督教の確立、日本基督教団の成立を報ずると共に、信望愛を同じうする基督信徒として、共栄圏内の基督信徒に対して慰安、奨励提携の衷情を吐露する書翰を送らねばならぬ。茲に大方の応募を求むる次第である。

◇ 募集規定 ◇

- (一) 筆者 日本基督教団所属の教師、信徒
- (二) 紙数 四百字詰三十枚内外

資料 135 懸賞書翰入選の決定とその発表

一、懸賞書翰入選発表ノ件

富田教団統理者ヨリ説明アリ瀧澤主事別記ノ如ク発表シテ之ヲ承認ス

過般懸賞募集せる「日本基督教団より大東亜共栄圏内に在る基督信徒に送る書翰」の応募原稿七十五篇の中厳選の結果別掲の如く入選決定せり

「日本基督教団より大東亜共栄圏内に在る基督信徒に送る書翰」

懸賞当選発表

過般懸賞募集せる「日本基督教団より大東亜共栄圏内に在る基督信徒に送る書翰」の応募原稿七十五篇の中厳選の結果左記の如く入選決定せり。

入選

- 一等(一名) (該当者なし)
- 二等(二名) 鮫島 盛隆(関西学院宗教主事)
- 三等(三名) 山本 和(日本女子神学校講師)
- 三浦 清一(松沢教会)

和田 信次(宮崎教会教会主管者)
選外佳作(五名) 氣賀 重躬(青山学院教授)

郷司 慥爾(白金教会教会主管者)

篠原和太郎(白目教会)

日高 善一(豊島駒込教会教会主管者)

藤家 一六(福山本町教会教会主管者)

昭和十八年十月二十八日

日本基督教団

〔教務会〕(一九四三・一〇・二八) 〔教団時報〕

一九四三・一一・一五)

資料 136 『日本基督教団より大東亜共栄圏に在る基督教徒に送る書翰』

序 文

基督教は福音である。即ち「大なる歡喜の音信」である。故に四福音書あり、福音を伝えるために使はされた徒の旅記あり、使徒パウロの著作は何れも教会或は同信同志の人々に贈つた書翰である。福音書に始まつた聖書はアジヤの七教会に贈つたヨハネの書翰で終つてゐる。基督教は実に福音である。

を得ない。

予は教団の統理者として種々記したい事多いが、今は書翰を紹介する文だけに留め、後便に譲る事とした。書翰を読んだ人々にして其の腹藏なき応答を寄せられるならば、我等の喜悅これより大なるは無い。

最後に予は二十年來伝へ來つた使徒的挨拶を以て此の序文を終らう。「願はくは、主イエス・キリストの恩恵、神の愛、聖靈の交感、汝ら凡ての者と偕にあらん事を。」

昭和十九年

千九百四十四年復活節の日

日本基督教団

教団統理者 富田 滿

第一章

我ら、日本に在りてキリスト・イエスとその福音とを告白し、その恩寵の佑助によりて一國一教会となれる日本基督教団及び其に属するもろもろの肢は、東亜共栄圏内に在る主にありて忠信なる基督者たちに心よりの挨拶を送る。願はくは我らの主イエス・キリストの恩寵と平安、常に諸君の上にあらんことを。

主に在りて忠信なる兄弟たちよ。我らは未だ面識の

今茲に日本基督教団が東亜共栄圏内の緒教会及び同信同志の兄弟達に書翰を贈る所以は、基督教が「大なる歡喜の音信」であると云ふ信仰に基く為にして之を現代の使徒的書翰と称するも言ひ過ぎでなからう。

日本基督教団は東亜共栄圏内の基督教会对して常に関心を有し其の発達のため熱禱して已まない。これが為め教団は共働者を遣し、又必要なるものを送らうと計画してゐるが今日の事情に於ては其の志望の如く実行できないのを甚だ遺憾としてゐる。已むを得ず、先づ教団を代表する公同的使徒的書翰を送つて挨拶し、我等の平素の志を略述する事にした。其の詳しき内容に就いては受信者が本書翰を詳かに通読せられん事を望む。

日本基督教団の現代的使徒書翰は、本書が第一信であつて、続いて屢々書翰を贈る計画である。望むらくは諸君が此等の書翰を隔意なく迎へて、これを文字通りに解釈して、我等の志を理解し、信望愛を同じうせられん事である。少数ではあるが日本基督教団より特派した伝道者あり、書翰中に若し諸君に理解し難き所あらばこれを詳かに懇ろに説明するであらう。彼等も亦、使徒パウロの記せし如く「基督の書」であるから諸君は隔意なく彼等と親交せられん事を併せ望まざる

機会なく、互に伝統と生活の慣習とを異にしてゐるが、かかる諸々の相違にかかはらず我らを一につに結ぶ鞏固なる紐帯が二つあると思ふ。其の一つは、我らの共同の敵に対する共同の戦ひといふ運命的課題である。彼ら敵国人は白人種の優越性といふ聖書に悖る思想の上に立つて、諸君の国と土地との収益を壟断し、口に入道と平和とを唱へつつ我らを人種的差別待遇の下に繋ぎ留め、東亜の諸民族に向つて王者の如く君臨せんと欲し、皮膚の色の差別を以て人間そのものの相違でもあるかのやうに妄断し、かくして我ら東洋人を自己の安逸と享樂とのために願使し奴隸化せんと欲し、遂に東亜をして自国の領土的延長たらしめやうとする非望を敢てした。確かに彼らは我らよりも一日早く主イエスの福音を知つたのであり、我らも初め信仰に召されたのは彼らの福音宣教に負ふものであることを率直に認むるに吝かではないが、その彼らが今日飽くなき貪りと支配慾との誘惑に打ち負かされ、聖なる福音から脱落してさまざまの誇と驕慢とに陥り、如何に貪婪と偽善と不信仰とを作り出したかを眼のあたり見て、全く戦慄を覚えざるを得ない。かくの如き形態を採るに至つた敵米英の基督教は、自己を絶対者の如く偶像化し、嘗て使徒がまともに其の攻撃に終始したユダヤ

的基督者と同一の型に嵌つたのである。「汝ユダヤ人と称へられ、盲人の手引、暗黒に在る者の光明、愚なる者の守役、幼児の教師なりと自ら信ずる者よ。何ゆゑ人を教へて己を教へぬか。竊む勿れと宣べて自ら竊むか。姦淫する勿れと言ひて姦淫するか。偶像を悪みて宮の物を奪ふか」(ロマ書二・一七—二二)。これは悉く先進基督教国を以て自認する彼らの所業に当嵌つてはゐないであらうか。彼らがもしこのやうな自己の罪に目覚め、悔改をなし、一日後れて信じた我らと同一線上に立つて始めて信ずる者の如く日毎に主を告白する純真な信仰を有つてゐたならば、かかる反聖書的な東亜政策を採るに到らなかつたであらう。彼らが若し主への真の従順と奉仕とを日毎に決断し実行してゐたなら、自国の内外の政治軍事経済文化の凡ゆる領域に亘つてあのやうな敗退と混乱とを演じないですんだであらう。

我らは聖書に基く洞察と認識とによつて彼らの現状を憐むと共に、この不正不義を許すべからざるものとして憎まずにはゐられない。

日本はこの敵性国家群の不正義に対して凡ゆる平和的手段に出でたるに拘らず、彼らの傲慢は遂に之を容れず、日本は自存自衛の必要上敢然と干戈を取つて立

に彼の所屬であるといふことである。彼は我らの生と死に於ける唯一の慰めであり、教会の主であり給ふ。我らはこの天地の主なる神の御言また御子が肉体を取り、我らの如きもの一人として、我らの兄弟として、今此処に立ち給ふことによつて、何等の代償無くして、唯御恩寵に由り主イエスの兄弟としての破格の待遇に浴し、一切の罪を赦され、罪と死との彼岸にある永遠の生命の約束に与る神の子たちの新しい身分に移されたのである。信仰者の生にとつてこの主を認識し、この主に奉仕すること以上に貴重なる財産は何一つない。兄弟たちよ、我らは、この信仰の認識と奉仕とを、この感謝と讚美とを、我らより奪ひ去りうるものは何一つとしてないといふ確信に於て一致してゐる。この主より賜はりたる貴き福音の富を、我らの同胞と隣人に持ち運ぶ愛の委託を我らより奪ひうるものは何一つとしてないのである。「而して御国のこの喜びの使信はもろもろの民族への証言として全世界に亘つて宣伝へられん」(マタイ伝二四・一四)。我らがかかる約束を賜はつたといふことは、福音宣教の唯一の命令に縛り付けられたといふことに他ならない。我らは罪人たる我らの業や言に頼つて、どれだけこの約束を実証し、どれだけこの命令を果しうるであらうかを知らない。

つた。而も緒戦以来皇軍によつて挙げられた諸戦果とその跡に打樹てられた諸事実とは、我が日本の聖戦の意義を愈々明確に表示しつつあるではないか。彼らの不正と不義から東亜諸民族が解放されることは神の聖なる意志である。「神は高ぶる者を拒ぎ、謙だる者に恩恵を与へ給ふ」(ヤコブ書四・六)。それでは米英の高ぶりは何によつて排撃されるであらうか。皇軍の將兵によつてであり、地上の正義のために立ち上つた東亜諸民族の手によつてである。そして諸君の民族がこの大聖戦に我ら日本と共に同甘共苦、所期の目的を達成するまで戦ひ抜かうと深く決意し、欣然参加協力せられたことによつて、大東亜の天地には、我ら日本人と共に諸君の、即ち大東亜諸民族の一大解放の戦ひ、サタンの狂暴に対する一大殲滅戦の進軍を告ぐる角笛は高らかに吹き鳴らされたのである。聖にして義なる神よ、願はくは起き給へ！ 而して我らの出でゆく途に常に偕に在して、行手を照し助け導き給へ。兄弟たちよ、諸君と我らとを結ぶ第一の絆は、我らが相共にこの聖戦に出で征く戦友同志であるといふ深い意識である。

次に我らを種々の相違にも拘らず一つに結ぶ第二の、而も決定的な絆は、我らが共に主キリストを信じ霊的

しかし我々の罪ある被造的な、相対的な決意と努力と業とを通じて、真にこの命令を成し遂げ給ふ者は、我らではなく命令者イエス・キリスト御自身であり、ただ彼のみであるといふ確信において一致してゐると信ずる。またこの主イエスは、神を愛するともに「己の如く汝の隣を愛すべし」と命じ給うた。我らが主の福音を聞いたといふことは、必然的にこの主の誠命に聴き従つたといふことでなければならぬ。大東亜共栄圏の理想は、この主の隣人愛の誠を信仰に於て聞き、服従の行為によつて実践躬行することを我らに迫る。我らはこの主の誠命の下に立ち、凡ゆる障害を排して一直線に前進すべきである。この必然の道において我らは全き一致を示し得るではないか。「汝ら召されたる召に適ひて歩み、平和の繫(鞆帶)のうちらに勉めて御靈の賜ふ一致を守れ」(エペソ書四・一、三)。兄弟たちよ、我らは牛が力を合せて犁を牽くやうに、この強靱なる紐を牽いてゆかなくてはならぬ。これが諸君と我らとを結ぶ第二の決定的な索繩である。

第二章

愛する兄弟たちよ。

我らは諸君に期待し、諸君を信頼してゐる。諸君は

「凡そ真なること、凡そ尊ぶべきこと、凡そ正しきこと、凡そ潔よきこと、凡そ愛すべきこと、凡そ令聞あること、如何なる徳、いかなる誉にても汝らこれを念ひ」(ピリヒ書四・八)これを認むるに吝かでないであらうことを。この大東亜戦争遂行にあつて、我が日本と日本国民とが如何なる高遠の理想と抱負とを懐いてゐるかは、次第に諸君の了解されつつある所であらう。我らも亦政治経済文化の各局面で諸君と提携するために腐心し挺身しつつある我が朝野の、軍官民の先達たちの報告によつて、諸君の中に我らの学ぶべき「凡そ愛すべきこと、凡そ令聞あるべきこと」のあるを聞き知り、尊敬と共感と親愛の情を覚え、諸君に強く牽かるる思ひがする。諸君が地域の如何を問はず、文化の傾向を論ぜず、よきものに共感し、尊きものを尊しとする公明正大の心を有ち、敵性国民の無責任にして放縱なる個人主義とは全く類を異にすることを確信する。而も諸君は人間の個性的な面に於てまことに深きものを包蔵し、各自の職域にあつて飽くまでも自己の深い信念に生き、それと密接に繋つてゐる高い公の犠牲的精神を備へてゐらるる様子を聞くに及んで、早く諸君の風貌に接したいと願ふ念ひや切である。神若し許し給はばいつか我らは諸君の許に往き、諸君も

兄弟たちよ。諸君は使徒が「凡そ真なること、凡そ尊ぶべきこと」と語つてゐるところのものは、単に教会の中なる諸徳について云つてゐるのではなく、教会の外の一般社会の中にある斯くの如きものを、思念せよ、尊敬せよ、と云つてゐるのである事を十分御承知と思ふ。この美徳を慕ふ感情においても諸君は我らと一つであられるであらう。分裂崩潰の前夜にある個人主義西欧文明が未だ一度も識らなかつた「凡そ尊ぶべきもの」が、東洋には残つてゐる。我らはこの東洋的なものが、今後の全世界を導き救ふであらうといふ希望と信念において諸君と一致してゐる。全世界をまことに指導し救済しうるものは、世界に冠絶せる万邦無比なる我が日本の国体であると言ふ事実を、信仰によつて判断しつつ我らに信頼せられんことを。

諸君の既に屢々聞き知つてゐられるやうに、我ら日本人の祖先は非常に謙虚に、而も積極的に、心を打ち開いて外来の文化を摂取したのである。中国よりは、君らの優れたる父祖である孔、孟の教を。印度よりは、君たちの聖者釈迦を開祖とする仏教と之と共に印度文明を。而も我らの先祖たちは決して当時の先進諸外国の文化に心酔したのでなく、非常に博大な心と謙虚な思ひをもつて之を摂取し習得したのみならず、高い強

我らの許に来つて、互に個人的に親しく相交り、顔と顔を合せて相識り、かたく手を握り合ふことも許されるであらう。しかし我らも諸君自身を相識ること浅い如く、諸君も亦我が日本の眞の姿を識ることに於て未だ十分であるかも知れない。乞ふ、我らが今少しく「大胆に誇りて言ふ」(コリント後書一一・一七)ことを許せ。

抑々我が日本帝国は、万世一系の 天皇これを統治し給ひ、国民は皇室を宗家と仰ぎ、 天皇は国民を顧み給ふこと親の子におけるが如き慈愛を以てし給ひ、国民は忠孝一本の高遠なる道徳に生き、この国柄を遠き祖先より末々の子孫に伝へつゝある一大家族国家である。我ら国民は、畏くも民を思ひ民安かれと祈り給ふ 天皇の御徳に応へ奉り、この大君のために己自身は申すまでもなく親も子も、夫も妻も、家も郷も、悉くを捧げて忠誠の限りを致さんと日夜念願してゐるのである。この事實は諸君が既に大東亜戦争下皇軍将士の世界を驚倒せしむる勇猛果敢な働きをみて、その背後に潜む神秘的な力として感付いてゐらるる所であらうが、一度でも我國の歴史をひもといた者は、その各員がこの精神に充ち満ちてゐることに驚異せられるに違ひない。

い国体への信念と之に基く自主性に立つて、これを我國振りに副ふやうに醇化し日本化して来たのである。かの聖徳太子の準備せられ中大兄皇子の完成し給うた大化の改新は、支那古代の儒教と制度文化が日本化して具現された最初の結実である。次に我が鎌倉時代の日本仏教特に道元の開いた日本禅は、印度の仏教が中国を経て我國の土壤に吸収消化され、之に全く日本的な新生面を開いたもので、この時代以後我が国民精神の基調となり日本武士道の培養の素となつたものである。又支那の蠶蠶、善導の浄土門信仰は、日本の法然、親鸞によつて世界の宗教学者達が驚歎するほどの絶対恩寵宗教の立場に醇化発展を遂げたのである。我が飛鳥天平の文化、平安時代の文芸より、鎌倉時代の武芸、禅学、彫刻にいたるまで、更に室町、安土、桃山時代の豪華なる建築、茶道、絵画、江戸時代の儒学、国学、蘭学より、さては明治維新以後のヨーロッパ文明の摂取醇化にいたるまで、凡て日本人の深い謙虚さと己を失はない高い信念との所産でないものはない。我らの父祖は此等の外国のよきものを虚心懐に学ぼうとしたと共に、深い批評精神に基いて之に創意を加へ、日本化し、独得の日本文化を産出し、今日の隆盛をいたしたのである。

かくの如き歴史の盛観を現出することを得た所以は、日本精神の創造的活動の根柢に儼乎たる尊嚴無比の国体が存したるに由る。殊に外来文化の摂取に當つて指導者達が常に新文化の先覚者であつたことは、日本精神が如何に強靱にして而も柔軟性に富んでゐるかを物語る。まことに靈峰富士に象徴せらるる明るき清き直き心である。

右の如き大精神は、ただ日本の国土内に留まるにはあまりに崇高にして広大無辺である。今より十余年前に独立し爾来益々発展を遂げつつある満洲帝国といひ、我らと協力して敵米英に宣戦した中華民國といひ、盟邦泰國、過ぐる日独立を祝祭した新生ビルマ国家、最近独立して新政府を組織した我らの兄弟フィリッピン、その他如何なる地域いかなる辺境といへども、恰も太陽が万物を光被化育するやうに、この大精神に照し掩はれてゐないものはなく、相共に深い決意を以て互に扶け、互に尊敬し、互に愛し、正義と共栄との美しい国土を東亜の天地に建設することによつて神の国をさながらに地上に出現せしめることは、我ら基督者にしてこの東亜に生を享けし者の衷心の祈念であり、最高の義務であると信ずる。

第三章

我国の有力な基督者の一人である内村鑑三は、当時欧米文明の滔々たる輸入と憧憬との支配してゐた時代風潮の中にあつて「世界は畢竟基督教によりて救はるのである。而かも武士道の上に接木せられたる基督教に由りて救はれるのである」と喝破した。彼は夙に欧米の特に米国の宣教師が成功と称して勢力と利益と快樂とを追求する信仰を非信仰として排斥し、宣教師の一日も早く日本より退散して、日本人の手による日本国自生の基督教の必要を叫んだ先覚者である。

彼の予言はまた諸君にも当嵌るところであり、心ある士が既に考へられてゐるやうに、大東亜には大東亜の伝統と歴史と民族性にと即した「大東亜の基督教」が樹立さるべきである。我らは今信仰における喜びと感謝と誇りとをもつて、日本には日本の社会と伝統と民族性にと基いた独得の日本の基督教会が建設されるに至つた。而もそれが愈々確立しつつあるといふ事實を報じたいのである。今その日本基督教確立の歴史的沿革と独自固有の性格とを簡略に述べたいと思ふ。

日本に基督教が渡来したのは、遠く天文十八年（一五四九）にフランシス・ザヴィエルが最初の宣教師として来朝したことに遡る。しかしこれはロマ・カトリ

ック教会の基督教であつて、プロテスタント教会の伝道は明治維新以後近代日本国家が世界に向つて開国したのちのことである。当時武士の子弟にして青雲の志を抱く前途有為の青年達が、宣教師の開きし聖書学校に最初は英語を学ぼうとして集ひ來つたが、実に測りがたき神の恩恵によつて彼等の中の或る人々に御言の種が植えつけられることとなつた。澤山保羅、新島襄、本多庸一、植村正久、海老名弾正、小崎弘道等みな純然たる日本武士が、此の教を聴くに及んでその中に日本武士道に通ずる深い奥義の秘められてあるを悟り、奮に一人の基督教信徒たりしのみならず、進んでイエスの命令「汝は往きて宣伝へよ」に全心全霊を以て従ひ、パウロの如く「然れど母の胎を出でしより我を選び別ち、その恩恵をもて召し給へる者」の声を聴き、「御子を我が内に顕して其の福音を異邦人に宣伝へしむるを可しとし給へる時」といふ信仰と自覚との下に、御言をこの国土と同胞との間に持ち運ぼうと深く決意した。彼らは走つた。併し彼らと共に御言が。主御自身が走り給うた。彼らは倒れもした。併し主は彼らと共に倒れ給はぬ。福音の宣教は未だ数少き幼い教会によつて大に行はれた。この様子を看て宣教師たちは驚いた。そして心ある者は秘かに考へたと云ふ。「日

本人は變つてゐる。日本人の伝道は日本人の手に委ねるべきである」と。かくして日本に於ける「使徒行伝」は彼ら初代伝道者先覚者たちによつて綴られていつた。或時は同胞の無理解と侮蔑と嘲笑を買つたが此やうな状況下に次第に信する者の数増し加へられ、日本の基督教会は生ひ立つていつた。主イエスは彼らの真実な活動によつてこの国に益々偉大となり、彼らの弱きときに彼等の中に神の力をもつて強く在した。ことに基督教は日本武士道に接樹され、儒教と仏教とによつて最善の地ならしをされた日本精神の土壤に根を下し花を開き結実していつたのである。

初代先覚者によつて薫陶された第二、第三の後継者たちも大君に捧ぐる清明心と隣人を敬愛する情誼と千萬人といへども我往かんといふ勇氣とを以て地上の一切の榮達を擲ち、キリストに把へられつつ後のものを忘れ前方の目標を追ひ求めていつた。そして個人主義・自然主義・社会主義・無政府主義・共産主義などの諸思想が猛り狂ひ、怒濤の如く押寄せて来る大正時代より昭和の初期にかけて、能く之に戦を挑み、キリストの真理を護り、肇国の大義に生き抜いたのである。これら日本基督教の指導者たちを偲ぶにつけても、我団体の本義と日本精神の美しくして蔽しいものが遺憾

なく発揚せられたる事実を想起し感慨無量である。

而して遂に名実とも日本の基督教を樹立するの日は来た。我が皇紀二千六百年の祝典の盛儀を前にして我ら日本の基督教諸教会諸教派は東部の一角に集ひ、神と国との前にこれら諸教派の在来の伝統、慣習、機構、教理の一切の差別を払拭し、全く外国宣教師たちの精神的・物質的援助と羈絆から脱却、独立し、諸教派を打つて一丸とする一國一教会となりて、世界教会史上先例と類例を見ざる驚異すべき事実が出来したのである。これはただ神の恵の佑助にのみよる我らの久しき祈の聴許であると共に、我が国体の尊厳無比なる基礎に立ち、天業翼賛の皇道倫理を身に体したる日本人基督者にして始めて能く為し得たところである。

かかる経過を経て成立したものが、ここに諸君に呼びかけ語つてゐる「日本基督教団」である。その後教団統理者は、畏くも宮中に参内、賜謁の恩典に浴するといふ破格の光栄に与り、教団の一同は大御心の有難さに感泣し、一意宗教報国の熱意に燃え、大御心の万分の一にも応へ奉らうと深く決意したのである。

本年四月には在来の諸学校が教団立神学校として統一され、教団の制度組織も形式内容も日々に整備せられ、全一団たる教会の実を益々具現しつゝある。之を

神的本質とは全く異質の人間の本性を身に纏ひ、人と成り給ひ、そのみならず更に進んで我らのために十字架の上に苦しみ、死し、この彼の途を地の底なきところまで進み給うた。而して父なる神の意志に我らに代つて完全に従ひ給うた。ここに神の人間に向つてなし給うた宥和と啓示との行動は、隠されつつしかも現実に起つた。このゆゑに神は彼を死の床より起し給うた。死人の中より甦へらしめ給うた。さうして彼の死人の復活を我らの救ひ、助け、力として栄光の中に証し給うたのである。まことにイエスは教会と共に全世界に父を示した予言者であり、教会と共に全世界に代つて父の許に執成をなし給うた祭司であり、全教会の主にて在し給ふ。

兄弟たちよ。我々はこのキリストを証する証人であり、彼の体であるといふことを銘記しようではないか。彼よりこの宥和を宣伝へる職務を賜はつてゐない者は彼の恩寵を受けてゐるとはいへない。彼なしには失はれてをり彼に於てのみ救の約束をもつてゐる全世界の、被造物の嘆きを聞かないでは、我らは教会の主の御声を聞いてゐるのではない。我ら大東亜の基督者が同胞諸民族の間でこの主の光を反射してから輝いてゐなければ、光を有つてゐるのではない。ナザレのイ

国史に徴するも一大盛事と謂ふべく、之を古より闘争に終始した西欧の教会史に徴するも、寔に主の日の予兆の大なる標識といふべきであらう。「遂に一つの群一人の牧者となるべし」(ヨハネ伝一〇・一六)

第四章

我らの敬愛する兄弟たちよ。

我らは諸君に我らの信仰を告白し我らの衷情を披瀝したこの長い書翰を結ぶ前に今少しく熟慮して頂きたいことがある。使徒パウロがピリピの教会に勧めてゐるやうに、我らはキリストの慰めによつて呼びかけられてゐる者として同じ愛と同じ思念とを懐き一つとならなければならぬ。我らは敵性国民らの基督教にのみならず、我ら自らの中にも、自己に立ち、己を高しとし、他を己に優れりとなし得ぬ罪が「唯一つの事」(ピリピ書二・二)を念はうと欲せざる人間固有の分裂的遠心作用が働いてゐることを人間存在の秘奥の底に認めざるを得ない。キリストはかかる我らに代つて我らの成し得ず又成さうと欲しない所を成し遂げ給うた。即ち彼は神の子であり神と同等の者であり給うたが、この彼の本来固有の所有をさへ我ら人間の如く固執することを事とし給はず、却て己を空虚にし、己の

エスの使信と犠牲の死と権能の証示とこそ、我らの慰めである。ただに我ら基督者のみならず、我らの属する大東亜諸民族の慰めである。彼の中に我らの途の終があると共に凡ての人の一切の途の終がある。彼の中に我らの途の始があると共に我らの同胞凡ての生くる途の眞の発端がある。この事こそ我らの希望である。甞に我ら基督者のみならず、東亜諸民族の希望である。繰返して云ふ。かのイスラエル民族によつて捨てられ、天地の主なる神によつて栄光の中に証示され給へる者、彼が我ら教会とその肢のみならず全世界の慰めである。我らが様々の運命と謎と苦難と死との中に存在しつつ而もそこで生命への信頼を有ち得る基礎は、イエス・キリストの栄光の日に於て、天地の更新に於て顕示せられるものに外ならぬ。これが我らの希望である。

兄弟たちよ、我々はこの慰とこの希望とを一つにするがゆゑに、同じ愛、同じ思念の中に一つとならなければならぬ。隣人愛の高き誠命の中にあの福音を聞き信じつつ大東亜共栄圏の建設といふ地上に於ける次の目標に全人を挙げ全力を尽さなければならぬ。我々はこの信仰とこの希望とこの愛とを一つにする者共であるから、同じ念ひ、共同の戦友意識、鞏固なる精神的鞏帯に一つに結び合はされて、不義を挫き、正義と愛

の共栄圏を樹立するためにこの戦争を最後まで戦ひぬかなければならぬ。我らはこのことを諸君に語る前に自分自らに語つてゐる。我らの盟友にして戦友よ！「汝らキリスト・イエスのよき兵卒として我らと共に苦難を忍べ」(テモテ後書二・三)。

我らは祈る。キリストの恩恵、父なる神の愛、聖霊の交際、我らがその実現の一日も早からんことを望みて止まざる大東亜共栄圏の凡ての兄弟姉妹の上にあらんことを。アメン。

5 第二次満州キリスト教開拓団の派遣

〔解説〕 第一次満州キリスト教開拓村建設から述べる。一九三二年に日本は満州を半植民地化し、さまざまな利権を得た。満州開拓移民事業もそれともなう事業であった。それは、抗日ゲリラや旧ソ連に対する武装集団を育成するため、また戦争によって窮乏した農民や小企業者、労働者を救済するための国策であった。

三八年五月六月に賀川豊彦は満州伝道に赴いたとき、満鉄関係当局の要請をうけ、開拓地を視察し、満州キリスト教開拓村の建設を日本基督教連盟に提案した。連盟農村伝道部幹事栗原陽太郎は現地調査を行なった。第一七回連盟総会(一九三九・一一)はこれを連盟事業として実施することを決議した。四〇年一月に基督教開拓村委員会が組織され、堀井順次(兵庫県飯盛野教会牧師)を開拓団団長に選んだ。彼は二回にわたり現地調査に赴いた。やがてハルビン郊外長嶺子に入植することが決まった。そこで開拓民の募集が始まり、祖師谷の基督教農村文化研究所内に設けられた武蔵野訓練所における一箇月の団員研修を経て、四一年二月から翌年六月まで八回にわたり一四五名の移民が実施された。連盟解散後、この事業は教団厚生局が引き継

ぎ、栗原も教団主事としてこの業務を担当した。

資料137は、東亜局が満州キリスト教開拓村建設事業を継承し、これを推進していった経過を明らかにする手書きの記録(郵紙、21.5cm×14cm一〇頁)である。その執筆者は栗原陽太郎である。彼は、一九三一年より日本基督教連盟農村伝道部幹事、日本基督教団設立後は伝道局主事、さらに東亜局兼任主事となり、この事業に専念した。彼はその活動を「満洲基督教開拓村委員会記録」、第一巻(一九四〇・六一四一・五)、第二巻(一九四一・六一四四・六)、「満洲開拓村入植志願者名簿」(一九四〇年度一四二・六)、「訓練渡満諸番式」、「東亜局日誌」(一九四四・四一〇)、「日本基督教団満洲第二開拓村記録」(一九四四・九一四五・三)とほぼ分類し得るものに記録した。ここに掲載するものは、最後に述べた記録の初めの部分である。これによって開拓村建設が東京都庁および大東亜省の提携と指示のもとにすすめられていたことが知られる。記録はその後のことも伝えているが、そこには戦局が厳しくなつて当初の計画が延期されたことや彼が入植者の結婚の斡旋に努めたことなどが記されている。それは、四五年三月一日に基督教農村文化研究所で行なわれた「先遣隊員訓練未了者(三名)訓練開所式」順序、「太平鎮基督教開拓団先遣隊未招致家族援護費」内訳で終わっている。

資料138は、前述の第二次開拓団入植者募集要領のビラ

(18cm×30cm一枚、手書き孔版印刷)である。その日付はないが、前述の記録から委員会が太平鎮入植を決めたのは四四年九月であるから、その頃のものであろう。「教団新報」(一九四四・九・二〇)にもその入植者募集が公告されている。このビラの裏面は「帝都疎開と満洲国開拓 東京都」と題する活版印刷となっており、「東京都も帝都疎開事業に伴ひ多くの人が大陸の沃野に敢然挺身して日滿一体化を具現し両国食糧事業に大いに寄与する所あらんことを切望してゐる」といい、特に帰農を志す人、建物疎開にあつた人、企業整備等による転廃業者に渡満をすすめ、政府の経費援助があり、農地は共同事業が終われば個人事業となる、とうたっている。

しかし、戦局もただならぬ情勢では、キリスト教開拓村入植希望者は乏しかった。東亜局満洲開拓村委員会はその募集をくりかえさなければならなかった。結局四四年一月までに八家族、一一名の団員(一名は幼児)を得たので、武蔵野訓練所における訓練ののち、先遣隊として四五年四月初めに太平鎮に向けて東京を出発した。

総計一五六名の開拓団員の悲惨な結末、戦後教団の対応は、戒能信生氏の論文、「太郎物語」の関係箇所述べている。

〔参考資料〕



第2篇 戦時下の日本基督教団
(1941~1945年)

編纂 = 日本基督教団宣教研究所教団史料編纂室
発行 = 日本基督教団宣教研究所

2

第2卷

日本基督教団史資料集

第2篇
戦時下の日本基督教団
(一九四一～一九四五年)
編纂 = 日本基督教団宣教研究所教団史料編纂室
発行 = 日本基督教団宣教研究所

日本基督教団
出版局



9784818459922



1923316070002

ISBN4-8184-5992-5

C3316 ¥7000E 日キ販

定価 (本体7,000円+税)

発売: 日本基督教団出版局

1978年2月5日 初版

2000年2月1日 再版